

新しい「寺」

r09035 佐藤康平



01. コンセプト

新しい「寺」を提案する。
城跡に建つ寺から宗教や形式を取り払い、寺が建てられた“経緯”をもとに再編集することで、バラバラになってしまった街と人と文化が再び一つになる空間を創出する。

02. 周辺分析

□ 計画背景

[人と建築と街]

人と人が出会い家が建てられ、更に人が集まり街ができた。人の営みに寄り添うように生まれた建築、街。そのあり方が変わってきているように感じる。

人から生まれた建築や街が、知らない間に複雑化し、人の居場所は消えていき、人の振る舞いさえも形式化している。

人と建築と街の関係が反転した現在において必要なものは何かを考えた。

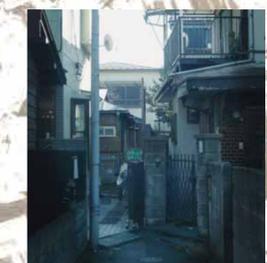
□ 周辺情報

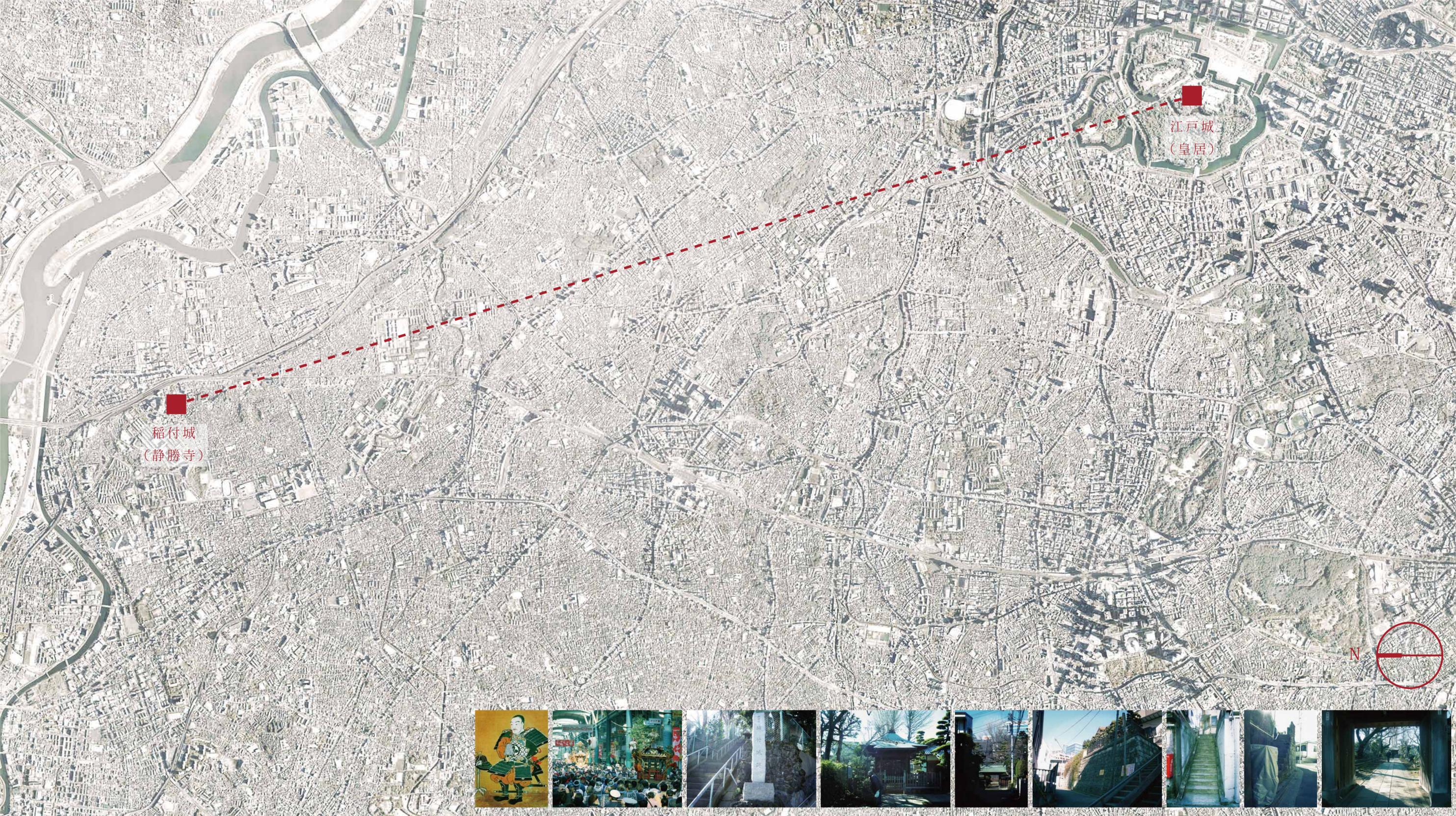
[閉じた2つの生活]

対象敷地のある赤羽駅北口は巨大な商業施設とマンションが建ち並ぶ再開発地区となっていて、そのすぐ背後には戦前から残る木造住宅密集地区が広がっている。

新しい生活と古くからある生活。2つの性質は大きく異なるが、どちらで行われる活動も一つの建物の中に閉じているため、異なる目的を持った人が交わったり、街の中でそっと佇めるような空間がない。

この街で生活するたくさんの人が何の関わりも持たずに各々暮らしている。





03. 敷地分析 / 選定

□敷地情報

対象地区：東京都赤羽駅北口地区
対象敷地：静勝寺（稲付城跡地）
用途地域：第一種中高層住居専用地域
敷地面積：10,000㎡
建ぺい率：60%
容積率：300%

□敷地分析

[城跡に建つ寺と街の歴史文化]

対象敷地は稲付城という城の跡地で現在は静勝寺という寺がその上に建っている。稲付城は江戸北方の砦として、江戸の最も北の台地に建てられた。この城を建てた太田道灌という武将は、外敵から町を守るだけでなく、歌や楽器の文化を町民に広めるなどして町に新しい文化と人々の交流を生んだ。その名残として現在も年に一度大赤羽という祭りが行われている。そうした功績を讃えるために建てられた静勝寺は、現在の街や文化、人と関わることなく存在している。

□提案

[新しい「寺」 - 様式から現象へ -]

かつて砦として街を守り、人の交流の中心、文化の中心にあった場所を讃えるにふさわしい新しい「寺」を提案する。様々な人の行為が排除され、形式化されてしまった現在の街において、佇みや交流といった人の曖昧で自由な行為を許容する空間こそが多くの人を引き寄せる中心になる。この寺を居場所として共有することで、場所がもつ歴史的な「意味」を寺の様式や宗教ではなく、人と街と文化が近づく「現象」として残すことを考えた。

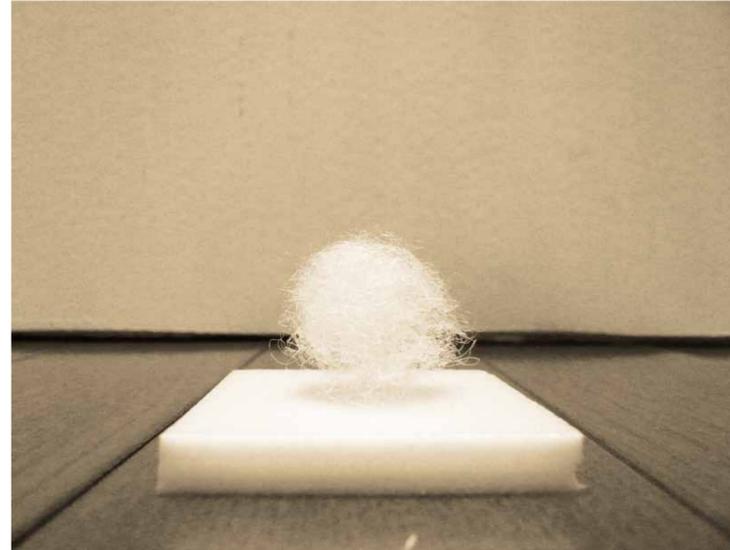


04. コンセプトダイアグラム

[場所の“意味”を“現象化”する]



長いあいだ、役割を見失い閉ざされてしまった城跡と寺。



様式や宗教を取り払い、この場所の持つ歴史的な“意味”だけを残す。



場所の“意味”が空間となり、“現象”によって継承される。

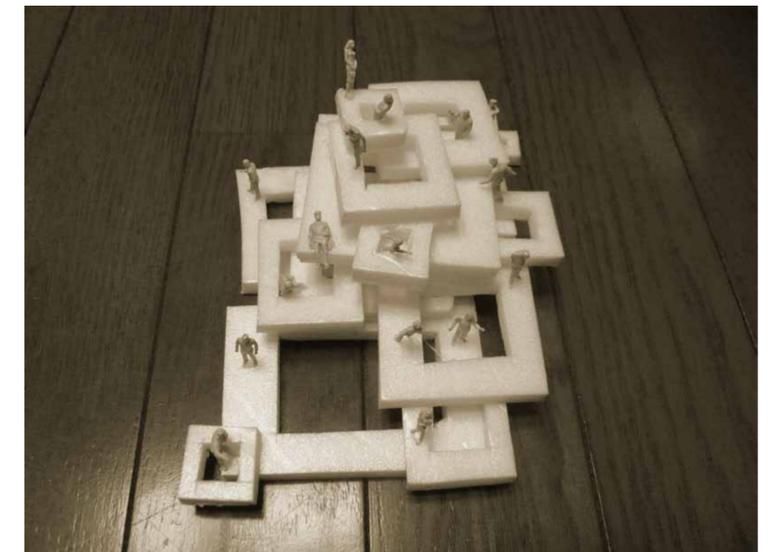
[敷地を解きほぐす]



街に溢れる建物は閉じた枠の積層になっている。



敷地と和えるように建築を解きほぐしていく。



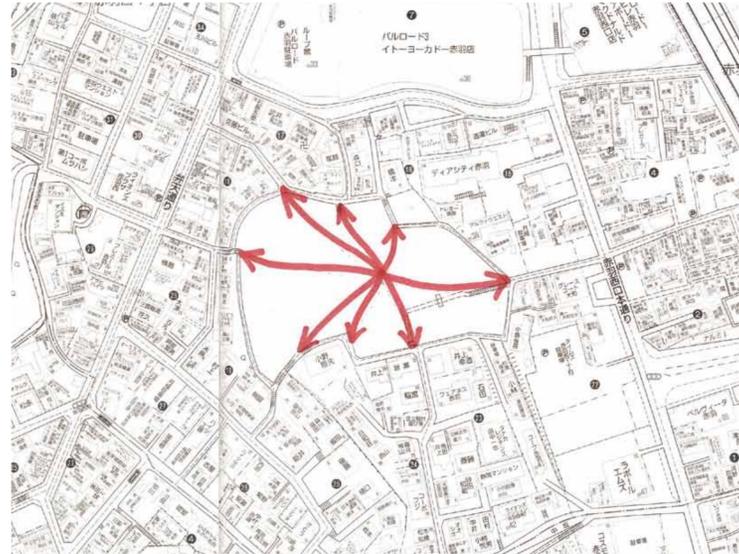
解放された枠が重なり合い、交わることのなかった人に関わりが生まれる。

05. 設計の手がかり

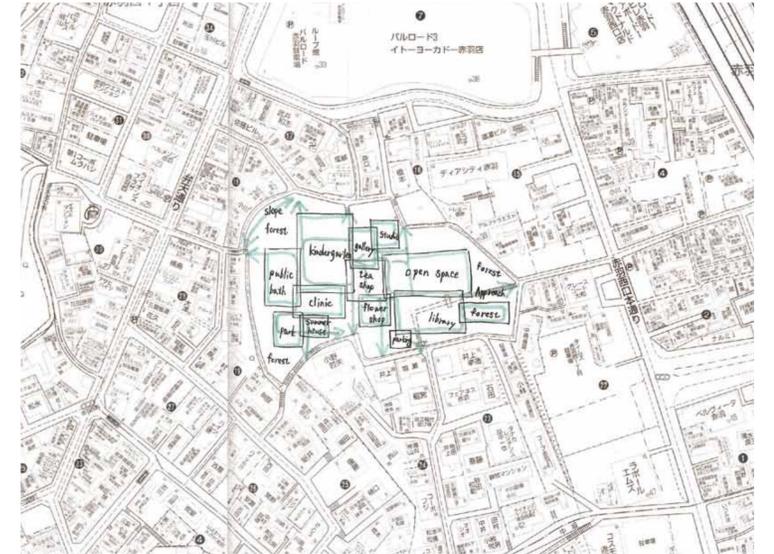
[近道に人が交わるきっかけを配置する]



敷地の唯一開かれた参道は近道として利用されている。

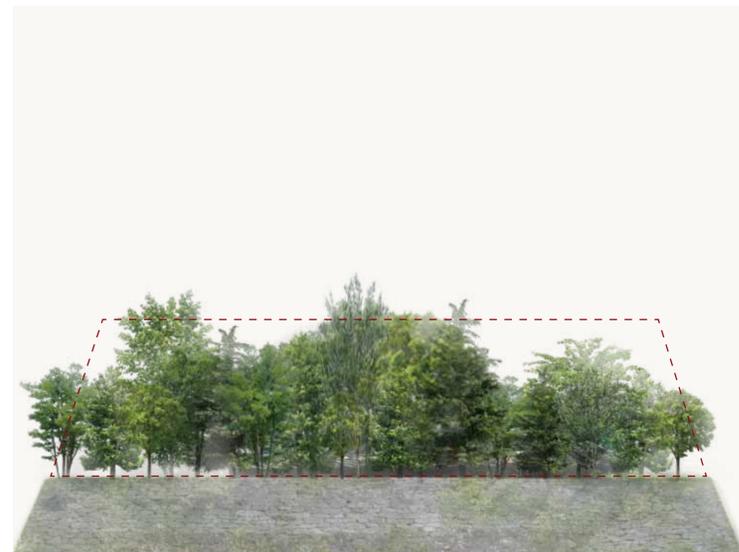


敷地全体を様々な近道として人が通れるようにする。

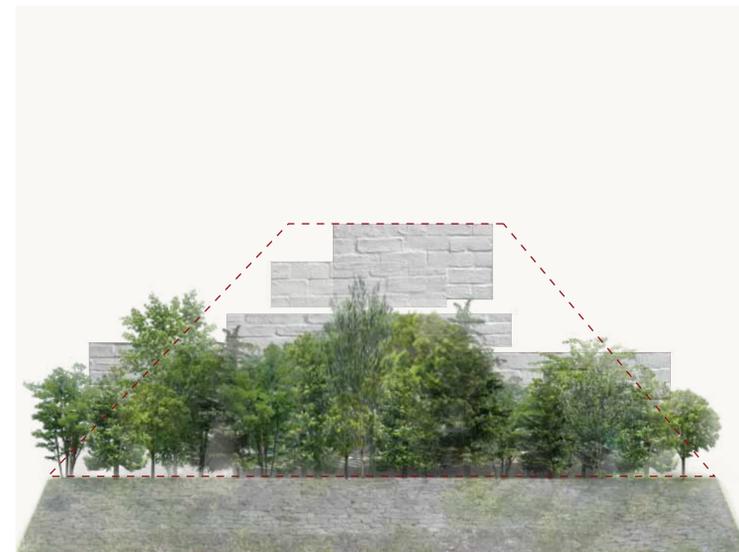


近道を囲うように、人が立ち寄るきっかけとなるプログラムを配置する。

[外に閉じて、内を開くことで人の関わりを密にする]



城跡の一部のように森が象徴的なマッサとして存在している。

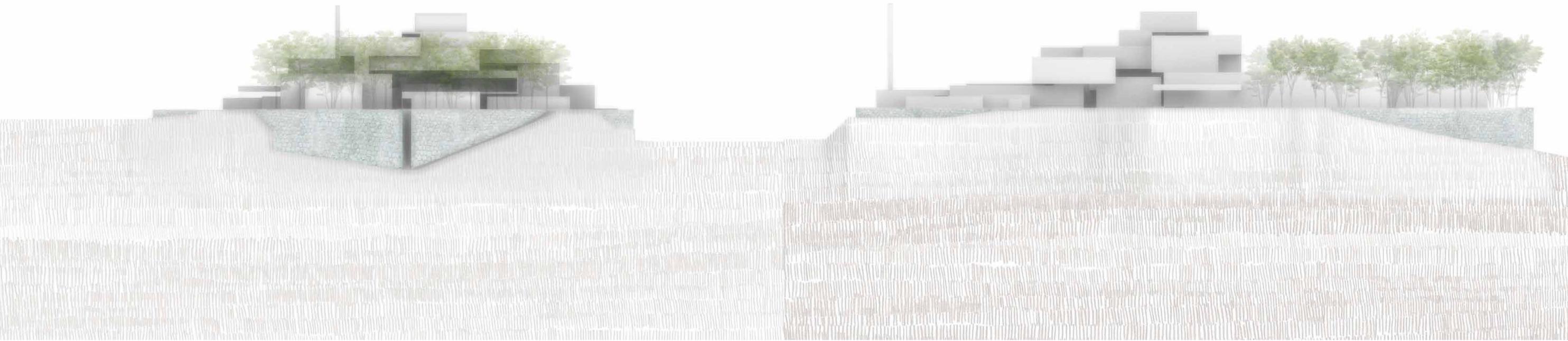


二つの関係をなぞるようにファサードのないマッサな建築を創出する。



マッサな建築を内側にひらくことで、個々の活動が密に関わりあう。

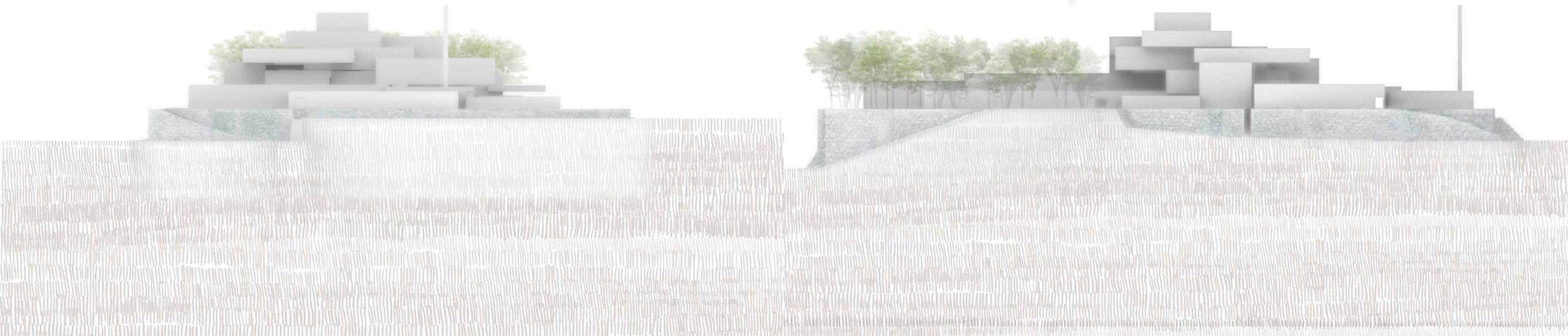
敷地に生い茂る木々と一体となり、巨大な岩のように見えたり



東側立面図（JR埼京線方面からの見え） Scale=1:200

南側立面図（木造密集地区からの見え） Scale=1:200

ひとつの建築が崩れ落ちた遺跡のように場所の象徴性を汲み取る

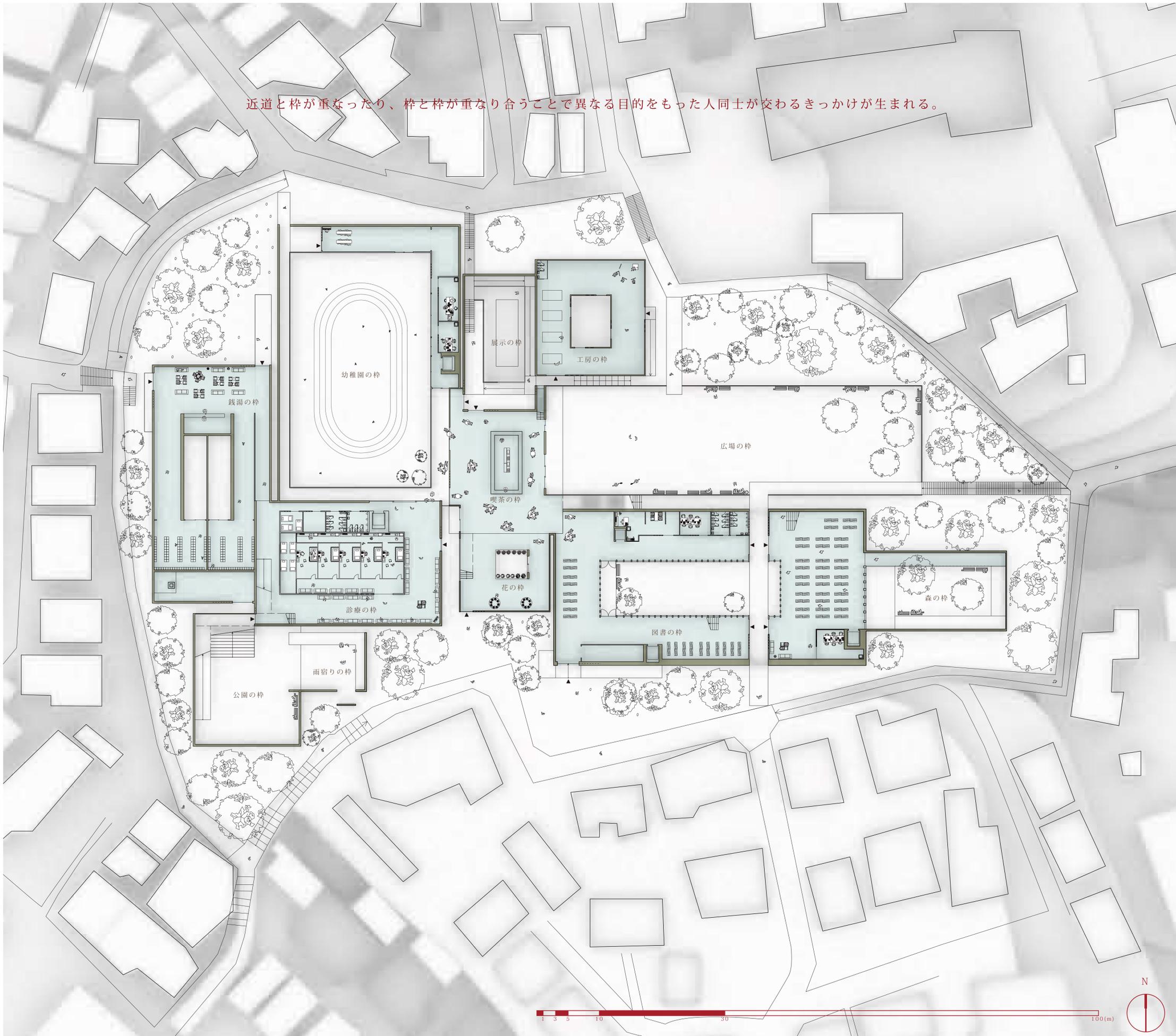


西側立面図（赤羽台団地からの見え） Scale=1:200

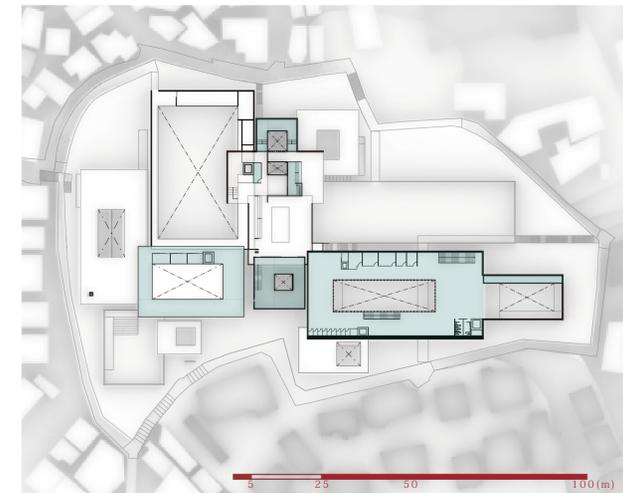
北側立面図（再開発地区からの見え） Scale=1:200

07. 平面図

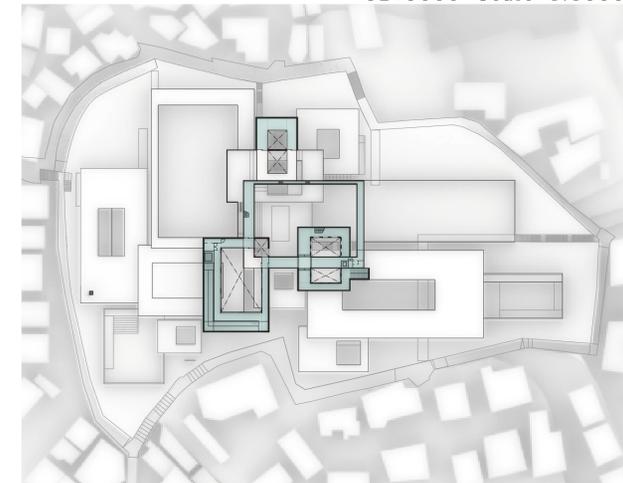
近道と桝が重なったり、桝と桝が重なり合うことで異なる目的をもった人同士が交わるきっかけが生まれる。



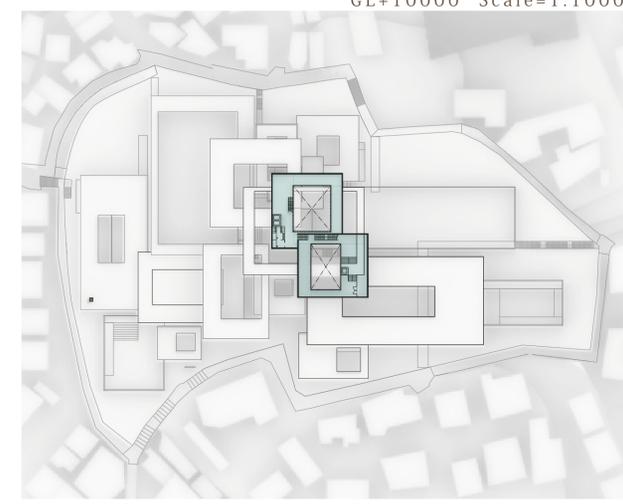
GL+1000 Scale=1:300



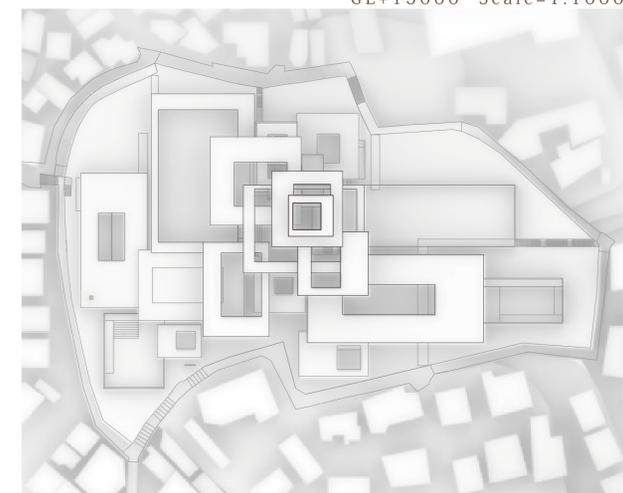
GL+5000 Scale=1:1000



GL+10000 Scale=1:1000



GL+15000 Scale=1:1000



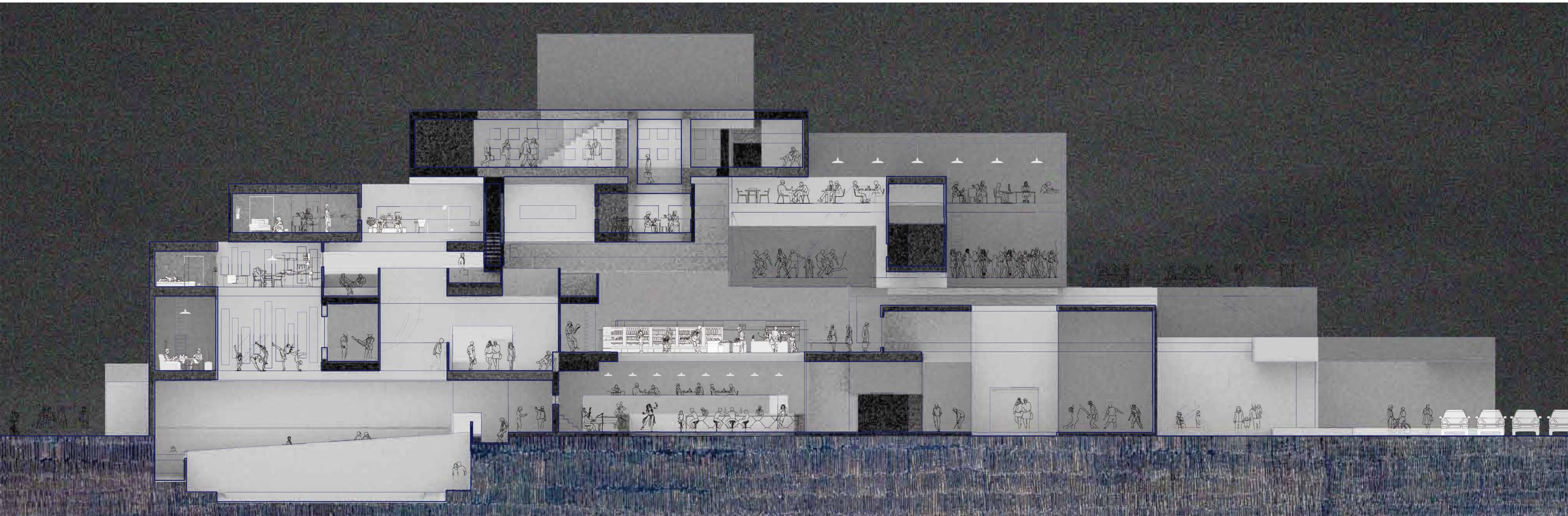
GL+25000 Scale=1:1000

08. 断面図

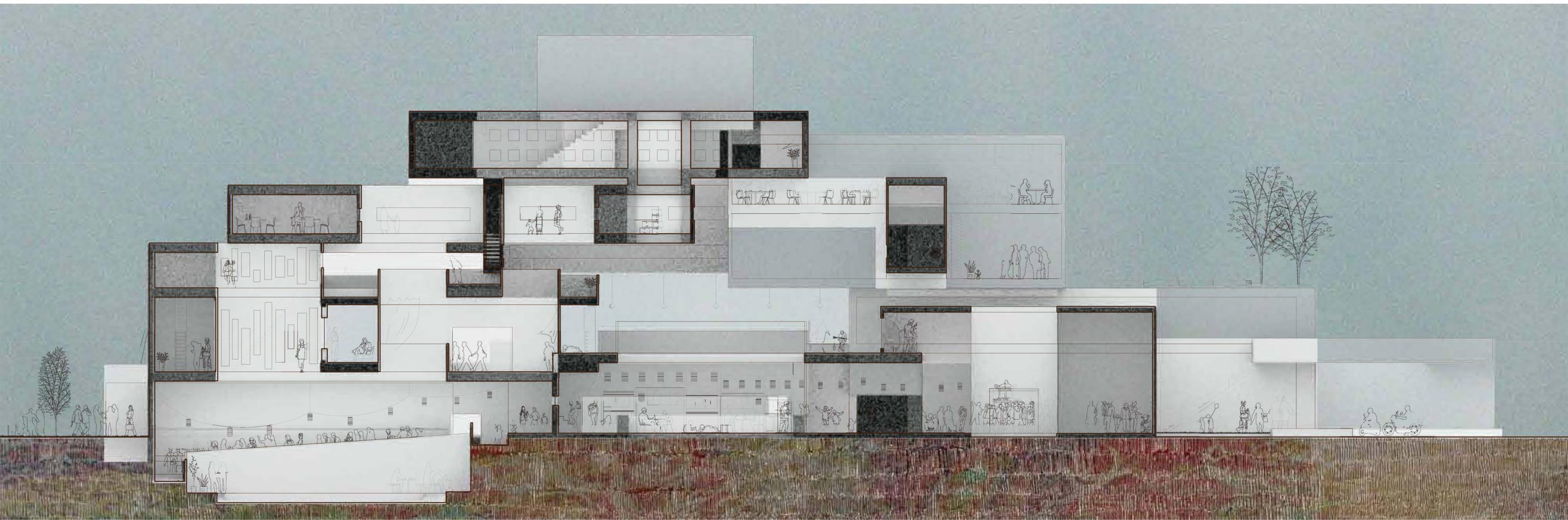


ある日の昼間、趣味を持ち寄って活動する人と散歩でふらっと寄った人が関わり合う。

S=1:100



ある日の夜、夜の宴をする若者から寝床を求め集まるホームレスまで様々な人が一つの新しい「寺」に集う。



大赤羽祭の日、文化と場所が一つになり様々な人が祝祭する。場所の“意味”は新しい「寺」により“現象”として継承される。

S=1:100 1 3 5 10(m)



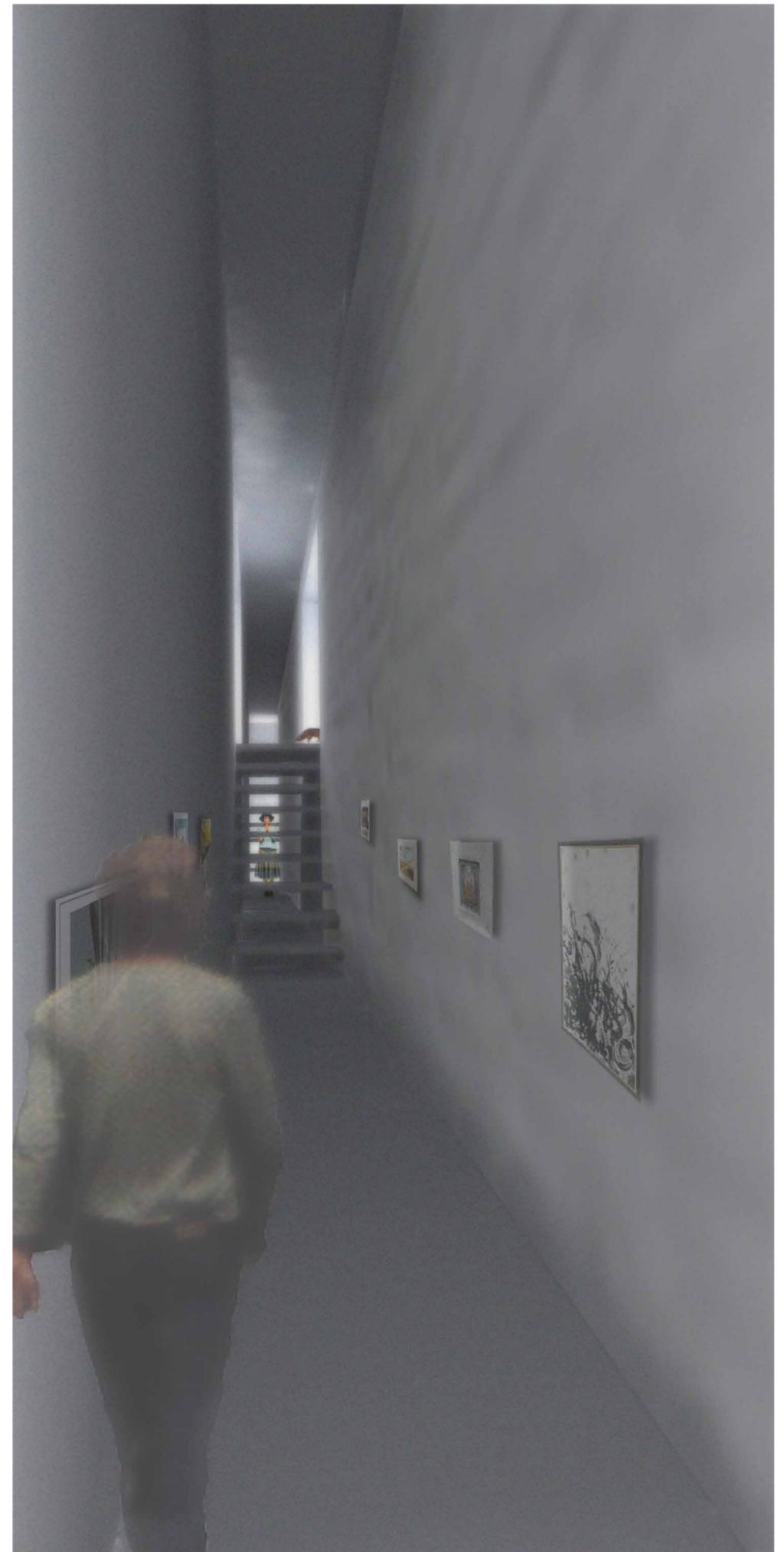
災害が起こった日、枠の中の機能は消失し、寄り添う人の行為によって空間が再定義される。

「暗い枠と明るい枠が重なるところ。」

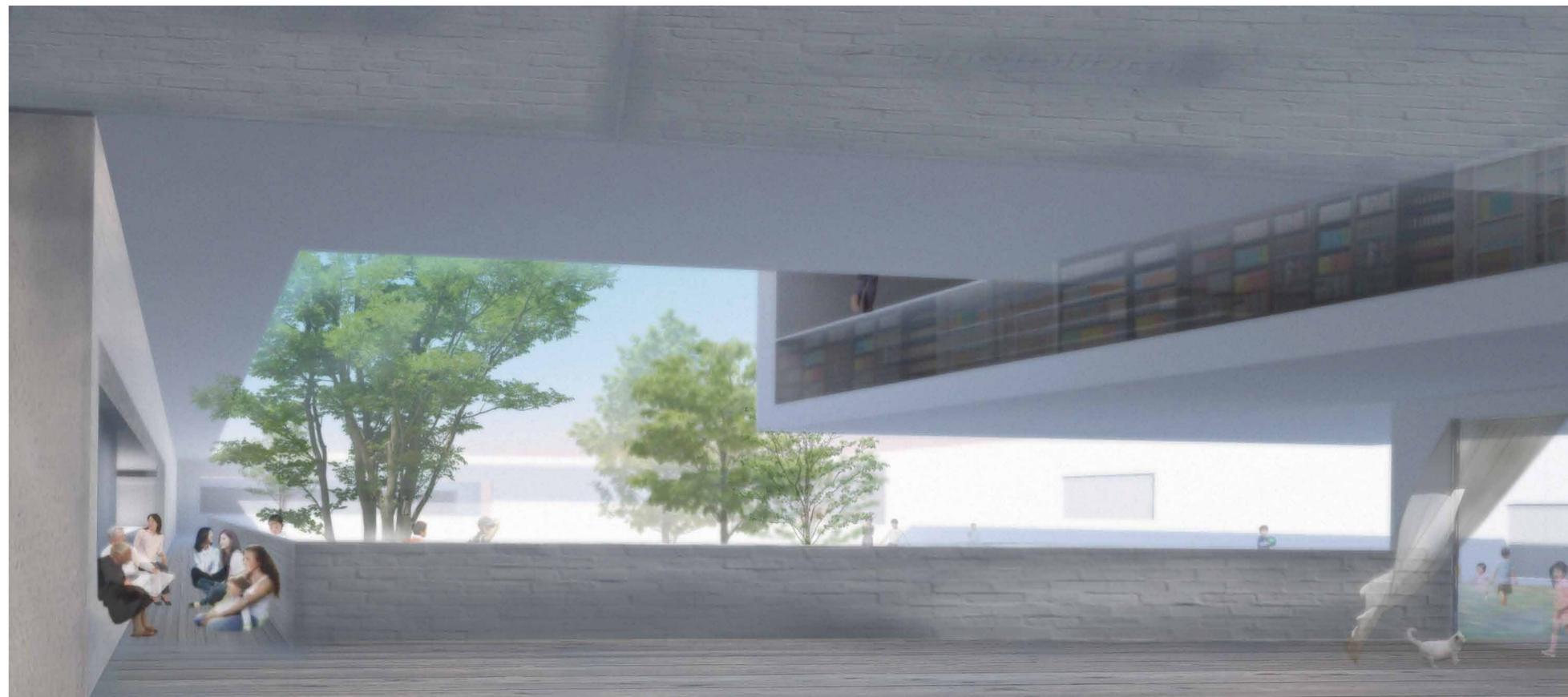
暗い枠と明るい枠が重なる空間は、ギャラリーとして利用されるようになった。

「たくさんの枠が重なるところ。」

ひとつの空間に幾重にも枠が入り込み、大きささまざまな居場所が生まれる。



「喫茶の枠と地下の枠が重なるところ。」
喫茶の枠と地下の枠が重なる空間には月明りが差し込み、
宴を楽しむ若者から寝床を求めるホームレスまで様々な人が集まる。



「幼稚園の枠と診療所の枠が重なるところ。」
幼稚園の枠と診療所の枠が重なる空間は、育児相談の場所になった。



「広場の柱と重なるところ。」

大赤羽祭りの日。

重なるいくつもの柱は広場の柱を中心に大勢の人で賑わう。



10. Epilogue

新しい「寺」は人の自由な行動を許容し、交流の溢れる居場所となる。
それはかつて外敵から江戸の街を守った砦・稲付城と同じように人と街と文化をそっと近づけていく。